低迷が続く「青島」に再び流行の兆し

宮崎市の宮崎空港から車で10分ほど南下すると、波で削られた珍しい岩（波状岩）が並ぶ海岸線が見えてくる。通称「鬼の洗濯板」と呼ばれる景勝地で、海水浴場や宿泊施設などが建つ一帯が青島地区だ。昭和30年代から50年代初めに「新婚旅行のメッカ」と呼ばれ人気を集めた宮崎県。真っ青な空にヤシの木が揺れる南国情緒あふれる景色にあこがれ、多くのカップルが訪れ、その代表的な観光地が青島だった。

だが新婚旅行ブームが去った後はホテルや観光施設が次々と閉鎖し、長く低迷が続いてきた。そんな青島で近年、観光に復調の兆しが見え始めている。数年前から外国人旅行者の姿が目立ち始めたのだ。と言っても、大型バスで訪れる団体客ではない。少人数で来て滞在しながらゆっくりと休日を楽しむ観光客だ。その呼び水の一つとなっているのが青島海水浴場で4年前から実施されている「青島ビーチパーク」。4～9月に飲食や物販の店が出店するが、雰囲気はかつての海の家とは異なる。マリンスポーツや各種体験を楽しんだり、パラソルやハンモックでくつろいだり、ハンバーガーやピザを食べて海辺でゆったり過ごしたりという、ビーチリゾート的な演出が受け来場者も右肩上がりだ。

自然豊かな場所でゆっくり休暇を過ごすという外国人のスタイルに合ったのだろう。会員制交流サイト（SNS）などで情報が共有され、旅の途中に青島まで足を伸ばすという外国人旅行者が少なくないようだ。地元民間企業が外国人旅行客に行ったアンケート調査（2016～18年）でも県内観光地の知名度は、青島が高千穂を上回り1位だった。

近年は周辺施設の整備も進んでいる。県の亜熱帯植物園のリニューアルや土産物、飲食店の新規出店も相次ぎ、一帯に人の流れができ始めている。低料金の宿泊施設オープンに続き、閉館後約30年放置されてきたホテル跡地でも再開発計画が動いている。新たなブランディングが旅のトレンドに合致し、息を吹き返しつつある青島の今後の展開が楽しみだ。

宮崎日日新聞社東京支社報道部長　高森　千絵

今年も4～9月からオープンした青島ビーチパーク。初日から観光客らでにぎわった＝2019年4月26日